三

一刻後、磐音は富田の居室に誘われて、茶を振る舞われた。同席したのは、ご隠居と富田が呼んだ老人だけだ。

「いや、よいものを見せてもらうた」

富田が改て言うと、

「坂崎どのは永の浪人暮らしとも思えぬ。それになんぞ事情があって、金沢に来られたようじゃな」

と訊いた。磐音は、はいと返答して迷った。すると、

「ご迷惑ならこれ以上は訊かぬ。だがな、地の者の助けがいるのなら話してみられぬか」

と言い出した。

磐音はしばらく瞑想した後、両眼を開いて頷いた。富田の親切は、未だ紹介されぬご隠居と関わりがあるように思えたからだ。

「不快な話なれば、お聞き捨て願えますか」

「相分かった」

「藩の名はお許し下さい。それがし、およそ一年前までは、西国筋の大名家の家臣にございました。それが……」

と磐音は、藩を離れた理由から許婚の奈緒が身売りした経緯、さらには長崎に始まる追跡行の粗筋を告げた。

「……富田先生、女々しき男とお蔑みかもしれませぬが、これがご当地に参った理由にございます」

磐音が話を終えると、ご隠居がぴしゃりと膝を叩いた。そして、富田が、

「一人の女子を助けるために身を捨てられた。なかなかできるものではない。富田源昌、感服つかまつった」

と言い切った。そして、ご隠居に顔を向けると、

「ご隠居、途方もなき話ではございませぬか」

「加賀が九万八千貫と言われた御金蔵の蓄えに手をつけたのは、網紀様の時代じゃ。その折りは返済いたしたが、吉徳様の御世以降は、御金蔵の金子は減るばかりじゃ。そのような折り城下の御用商人と組んで、千両で売り買いする女の贈り物を受けるなどもってのほかである」

とご隠居が憤然と言い切った。

「坂崎どの、ご紹介が遅れたが、ご隠居は年寄衆、長家の先代、尚常様でござる」

年寄衆とは八家の別称で、長家はこの年寄衆の中で禄高が二位の三万三千石、利家以来の家柄であった。

「ご隠居が朝の散歩の折り、そなたの犀川河原の稽古を見て、興味を持たれてな。まさか、その者がわが道場を訪れようとは思いもよらぬことであったが……」

と独語するように言った富田は、

「尾張町の三河屋はよき噂は聞きませぬな」

と再び尚常に向けた。

「強引な商いを繰り返していると聞いておったが、観音坂下の女郎屋などと手を組んで、女を妾にさしださんとする振る舞い、見過ごせぬな」

「肝心なのは、三河屋が奈緒どのを人身御供に差し出す先です」

「決まっておるわ。犀川と浅野川に公許の遊郭をと、楼主のお先棒を担いでおるものがおる。大方、そこいらに相違あるまい」

どこ隠居の尚常が言い切った。

「坂崎どの、そなたにはこの者のなを申せぬ、藩の恥になるやもしれぬでな。ともあれ、ちと時を貸してくれぬか」

「恐縮にございます」

「とは申せ、われらができることは、御用商人と遊郭の主がそなたの許婚を家臣の妾に差し出すことを止めることぐらいじゃぞ」

身請けは磐音の才覚でせよと長尚常は命じていた。

「畏まってございます」

磐音は加賀百二万石の中に強い味方が現れたことを心強く思いながら、富田と長尚常に頭を下げた。

磐音が河原町の土蔵屋に戻ったのは、夕刻前のことだ。

富田道場を辞去した後、金沢城下をあちらこちらと見物して回ったせいで、よい頃合いになった。

旅籠は泊り客で賑わっていた。

磐音が階下の囲炉裏端で一休みしていると、玄関口に鶴吉の痩身が立った。鶴吉は旅籠の中に入ってくる気はないらしく、磐音に小さく顔を振った。

「今、参る」

磐音は、かたわらの菅笠を手に着流しの腰に包平を落とし込んで、土蔵屋を出た。

「足労をかけたな」

鶴吉は頭をちょいと下げると、

「江戸の方には分かりにくいかもしれませんが、金沢では、八家、人持組、平士が侍のうちだ。この中でも本座者と新座者に分かれる。本座者は、利家様以来の股肱の臣でさあ。これに対して、利家様が越前府中を領していた時代に領地外から登用された者たちだ。この者たちを譜代衆に対して新座者と呼び、本座者と区別していますんで。八家の中にも新たに召し抱えられた長家や本田様のような家系もございますから、一概に新座者が低く扱われるということはございませんがねえ」

と説明した鶴吉の足は城の方角に向かっていた。香林坊から東へ向かう城下の廣坂をぐいぐいと上る。

磐音は鶴吉に黙って従った。

「新座者の中に禄高三千に百石、盛末龝三郎様と申される方がおられます。役職は町奉行でさあ。このお方が、御用商人の米問屋三河屋と昵懇の間柄だ。玉松楼が京から買い取った奈緒様を人身御供に送る先は、どうやら盛末龝三郎のようなんで」

長尚常が藩の恥になると言い及んだ家臣とは、盛末か。

二人は城の東側に回りこみ、金沢城下の高台、小立野台地の中央を南東に伸びる道に入り込んだ。

「ここいらは石引町と言いましてね、八家の年寄役奥村丹後守、高禄の家臣の屋敷が並んでいます。石引とは、城の石垣を運びこんできた道ということらしゅうございます」

鶴吉は屋敷町の通りを辰巳用水に沿って東へと向かった。一丁も行った屋敷前で鶴吉は歩みを緩めたが、止めることはなかった。

「町奉行盛末様の屋敷でさあ。盛末様は婿養子に入られたそうで、屋敷にはおっかねえ奥方と姑どのがおられるとか」

「それで外に妾を囲われるつもりか」

「まあ、そんなとこでございましょうね」

「町奉行職というのは、役料がつくのか」

「婿どのが外に女を囲うほどつくとも思えませんがね」

「玉松楼と三河屋が組んで、犀川と浅野川に二箇所の公許の遊里を画策しているそうだな」

おや、という顔をして鶴吉が磐音を見た。

「たまたまな、知ったのじゃ」

磐音は、富田道場での出来事を告げた。

「長家のご隠居様と知り合いになられましたかい」

と鶴吉が感心したように言い、

「旦那には、運がついているようだ」

と呟いた。

「金沢では新座者の旗頭に盛末様が祭り上げられていましてね、譜代衆と暗闘が繰り返されているんです。公許の遊里画策もそのひとつなんで」

屋敷が途切れ、波着寺という門前に出た。

鶴吉はその先の辻で右に折れた。

夜の静寂と相まって急に鄙びた感じに変わった。

「ともあれ、盛末様は、昼は町奉行所で取り締まり、夜は夜で裏奉行で取り締まりと精を出されておられましてねえ。玉松楼のような見世から運上金が懐に入る仕組みだ。妾を囲うくらいはなんでもないんで」

「これから参るのは盛末どのの妾宅か」

「へえっ」

と頷いた鶴吉が、

「旦那、奈緒様が連れ込まれたとしたら、ここしかありません」

と言い切った。

（ついに奈緒は他人の持ち物になったのか）

磐音の心中は複雑だった。

「どうしたものかなあ」

思わず呟く磐音に、

「旦那、盛末様は、夜の巡視には腕の立つ流れ者の浪人やらやくざ者を連れ歩いてまさあ。これから訪ねる屋敷にもそんな連中がいます」

と鶴吉が注意した。

夜の闇から弦楽の調べとざわめきが流れてきた。

疎水に囲まれた屋敷からだ。

「三河屋やら玉松楼の主たちが盛末のご機嫌とりに来ているようですぜ」

鶴吉が顎を振り、

「どうします」

と訊いた。

「奈緒どのがいるのならば、確かめておきたい」

「ひと思いに連れ出して江戸に逃げてはどうですかい」

「それができればなあ」

鶴吉は懐から手拭いを出すと頭から被り、捻った端を鼻の上にかけて左の頬に挟み込んだ。鉄火といういなせなかぶりかただ。

門は開け放たれていた。

二人は、門を潜ると宴が催されている座敷へと庭から接近していった。

立て閉められた障子に人影が映り、三味線の響きで手踊りでも演じているふうだ。

二人の行く手を苔むした庭石が塞ぎ、さらにその向こうに大きな泉水が広がっていた。

鶴吉が石の陰にしゃがんだ。

磐音も従った。

屋敷の背後から庭へと提灯を下げた浪人たちが姿を見せた。妾宅の警備にしては物々しいものがあった。

新座者と譜代衆の暗闘がこのような警戒をさせるのか。

二人は息を潜めて、浪人たちが遠ざかるのを待った。

「盛末様の行動にはご家中でも異論を唱える方がおられましてな、譜代衆の密偵が近付くのを警戒しているんでしょうよ」

鶴吉が囁いたのは提灯の明かりが屋敷の背後へと消えたときだ。

「今宵は奈緒様がいるかどうか、確かめればよいんで」

「そんなところかな」

「ここでまっておくんなせえ。まずは、わっしが座敷の様子を窺ってきまさあ」

鶴吉はそう言い残すと闇に没した。

磐音は庭石に腰を下ろして待った。

「酔い醒ましに夜風を……」

障子が開き、女の声が聞こえてきた。

庭下駄を突っかけた女が庭をそぞろ歩いて泉水を回り、磐音のいるほうに来た。

するとどこからともなく一つの影が女に寄っていった。無言のうちに女から結び文のようなものが渡された。影が頷くと再び闇に没した。

一瞬の間の無言劇だ。

新座者たちを結集して力をつけてきた盛末龝三郎の身辺に放たれた譜代衆の密偵か。

磐音は金沢城下の二派の暗闘を目の当たりにした。

女が宴の席へと戻り、再び秋の虫が鳴き始めた。

さらに四半刻、磐音は待った。

寒さが厳しさを増し、磐音は手足を動かして耐えた。

ふいに、

「何奴か！」

と誰何する叫びが響き、磐音が座敷に目を向けると、鶴吉らしい影が縁の下から這いずりでてきた。

座敷の障子が開かれ、鶴吉の後を追うように槍や抜き身を手にした浪人たちが庭に飛び出してきた。

「明かりを持て！」

「逃がすでないぞ」

騒ぎの中、鶴吉は磐音の待つ場所へと走り戻そうとしたが、追っ手を振り返り、屋敷の外へ逃れる道を選んだ。

磐音は闇を伝って鶴吉を追いかけた。が、鶴吉の背後には浪人たちが迫り、磐音はその後を追う格好だ。

鶴吉は屋敷の外に出ると、磐音と歩いてきた石引町への道へ戻ろうとしていた。

だが、地の利を得た追っ手たちは、波着寺の門前で鶴吉を挟み撃ちにして捕らえた。

「もはや逃れられぬ」

浪人の頭分が剣を手に迫り、残りの者たちが鶴吉を囲んだ。

頭分は大兵で、

「槍を貸せ」

と言うと剣を鞘に納めた。

鶴吉は波着寺の閉じられた山門の扉を背後にして、懐から合口を抜いて構えた。

「抵抗する気だぞ。おもしろい、溝鼠一匹、野町連太郎が槍の錆にしてくれる」

野町と名乗った頭分が黒柄の槍先を鶴吉の胸につけて扱いた。

「お待ちあれ」

のんびりした磐音の声が囲みの外でした。

鶴吉を囲んでいた浪人ややくざ者が慌てて振り向いた。

「夜分に大勢で何をなさるというのですかな」

「仲間か」

振り向いた浪人が手に提げていた抜身を、地擦りから叩き上げるように磐音の腰に振るってきた。

磐音は腰を沈めて包平を抜き上げた。

二本の剣が絡み、相手の剣が手から飛んだ。

「おおっ！」

「やりおったな！」

仲間たちが磐音を取り囲むように殺到した。

磐音はその場を動くことなく包平を縦横に振るって、剣や長脇差を弾き飛ばしていた。

一瞬の出来事だ。

無傷で残ったのは、鶴吉に槍をつけていた野町連太郎だけだ。

「おのれ！」

槍の穂先が廻された。

「田楽刺しにしてくれるわ！」

野町が叫んで黒柄を前後に扱き、磐音は包平を正眼につけた。

さすがに野町は槍の名手だ。動きに無駄がない。

磐音も必死にならざるを得なかった。

「おりゃおりゃおう！」

と叫んだ野町連太郎の穂先が波着寺の常夜灯に光り、磐音の胸板へするすると伸びてきた。

磐音が正眼の火焔平をやりの千段巻に擦り合わせ、横に叩いた。

穂先が流れた。

その瞬間、野町は穂先を手元に引きこもうとした。

が、懐に飛び込みざま、磐音が野町の首筋を刎ね斬ったのが一瞬早かった。

ぱあっ。

と血飛沫が飛び、野町連太郎は槍をてにしたまま横倒しに倒れ込んだ。

「鶴吉どの、参るぞ」

「合点だ」

二人は、闘争の場から走り逃れた。

鶴吉が足を緩め、

「旦那、驚いたねえ。普段はぼうっとしていなさるが、凄腕の持ち主だ」

と感心し、

「安心しなせえ、奈緒さまはまだ観音坂下のどこぞにいらあ。三河屋と玉松楼は、なんとしても盛末様に遊郭の公許を得ようと、奈緒様をまだ手元において駆け引きに使っているんだよ」

とその夜の成果を報告し、

「なんとしてもわっしが奈緒様の居場所を探しだしますぜ」

と請け合った。